

---

# もしも人の夢を体験出来るとしたら.....

日向

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

もしも人の夢を体験出来るとしたら……

### 【Nコード】

N23070

### 【作者名】

日向

### 【あらすじ】

「あなたの夢、覗かせてもらえませんか？」

人生負け組み海道まっしぐらだと思っていた俺に、唐突に掛けられた美少女からの言葉。どうやら世界は俺の知らないところで、人の夢を体験出来る技術を手に入れたらしい。

なんか俺の命を狙ってくるやつらや、天然爆発の美少女やら色々な奴らが関わってきて、もうわけがわからん！！

このすべての一挙一動は、どうやら俺の見る「夢」が原因なよう

で……、さらに彼女こと雨沢夢美にもなにか秘密があるようで……。

小説を書くのは初めてで、読みにくい箇所がいくつかあると思いますが、楽しんでもらえたら管理人はサイコーに嬉しいです！！

## ブローグ 少女との出会い（前書き）

最初の投稿ということで緊張が……。  
Enterを押す人差し指が震えてるのは、武者震いと思いたい。

## プロローグ く少女との出会い

「あなたの夢、覗かせてもらえませんか？」

四月七日、俺がこの高校で迎える二回目の入学式。

去年の今日と比べると、驚くほど関係のなくなった行事終了後、唐突に向けられた言葉に若干の驚きと戸惑いの反応を見せる俺こと浦隼人。

中学一年から高校一年までの間で、女子と会話をした時間をすべてつなぎ合わせても、カップラーメンが丁度いいくらいに出来上がる時間しか経たないくらい短いだろうなと考えていつも溜息をついている俺に、まさか高校二年の新学期初日という特別な日に声をかけてくる女性が現れるなんて思いもなかった。

上の階から降りてきたということは、恐らくは先ほどの入学式で、行列をなして先輩方の間を歩いていった憂いらしい後輩の一人だろう。

腰までとどくかと言うほど長い黒髪を左右に揺らしながら彼女は俺が立っている場所と同じ段差のところまで降りてきた

遠近法で気がつかなかったが、身長は結構高い。俺自身、学年の中で背の高いグループに属しているが、彼女は俺と肩を並べるほどだ。百七十は確実にあるだろう。

「お答えを」

「……ん？」

「私の願いに対するあなたの答えを要求しているんですよ？」

「……」

うん、声も悪くない。凜と透き通った声が、俺の五感すべてに浸透していくような感覚を覚える。

「サン、二、イチ……」

「え？ 何」

「ゼロ。はい、ドーン」

視界が逆転した。

嫌な浮遊感が、体全身を包み込む。

その理由が、階段から落ちたせいで生まれたということに気づくのに1・1秒、その犯人が、階段の中腹に立っている彼女だと気づくころには、俺は背中から廊下に落ちていた。

下校途中の人たちも行き交う中、どうやら俺は階段で後輩の女子にグーで殴られたようである。……え、なんで？

「レディを待たせるなんて、男失格ですよ、隼人先輩」

もう一度いいます、と、コチラに向かって満面の笑みを浮かべながら、

「私の名前は雨沢夢美と言います。あなたの夢、覗かせてもらえませんか？」

ここで、「な……なぜ俺の名前を知ってるんだっ！」なんてセリフが吐けたら、将来は俳優か警察官、もしくは探偵なんかになれていたかもしれないが、俺が考えていたことはただ一つ、……背中が物凄く痛いということだけだった。

## ブログ く少女との出会い（後書き）

最初は乗りに乗って、早めの投稿になると思いますが、最低でも一週間に一度は投稿出来たらと思います。

応援のほう、よろしくお願いします。



## 1章   ↳ 周囲の変化と俺の体調変化   part 1 (前書き)

二回目の投稿ということで、少し操作に慣れてきましたが、まだまだ怖い……。

しかし、あのアクセス数が分かる表示は便利ですねw

ランキングに乗るにはあと10000倍くらい必要ですが……。

## 1章      周囲の変化と俺の体調変化      part 1

改めて言うのもおかしいが、俺はいたって普通の高校生だ。人間偏差値なんてものが出来たら50ジャスト間違いなし、クラスの中でも、学校を休んだら10人くらいのクラスメイトには気づかれるが、残りは先生からの言葉があるまで気づかない……といった感じの。居ても居なくても世間的にはなんの支障も生まないであろう普通の人間。それが俺。

あえて、唯一人とちよつと違うところを挙げるとするならば、それは並外れた読書の時間だと思う。自分で自分の趣味を、「並外れた」とか言ってる時点でちよつとかつこ悪い気がするのだが、そんなこと気にならないくらい俺の読書時間は半端ない。

簡潔に述べると、俺は一週間に十五冊ライトノベルの小説を読むという生活を、一年と三ヶ月間続けてきた。

一日三冊で、土日は本を買うための金稼ぎということでバイトをしているので、一週間で十五冊。

きっかけは単純で、中学三年のときにあつた面接練習のとき、趣味を聞かれた場面で何も答えることが出来なかつたので、左隣の奴が言っていた『読書』というものをしてみようと思つたのが始まり。今ではもう読書は俺の生活の一部となつてしまっている。

そのため、俺の部屋は本が一杯に詰まつた本棚だらけだ。部屋の中央に立ち、左回りで順に家具を見ていくと、本棚、本棚、TV、本棚、本棚、机、……女の子、ベッド、本棚、本棚、本棚といった感じになっている。実に約半分もの空間が本棚によって奪われてい

るのだ。

現在時刻は一時十二分。一時間ほど前に、初めて遭った女の子に左頬を殴られるといった、ラノベ的展開があったのだが、今はもうそんな痛みは引いていて、むしろなぜあんなことをされたのか自分になにか非があったのではないかと、精神面でのほうのダメージが酷い。

まあ、目の前にその張本人がいるので、とりあえず聞いてみることにする。

「なぜお前がここにいる？」

「なんで回転イスじゃないのですか？ これじゃあクルクル出来ないじゃないですか。人生楽しい？」

「お前、何者なんだ？」

「この部屋、私の家の近くにある墓場の匂いがします。きっと先輩の前世はデュラハンですね」

「どうやって部屋の中に入ってきた？」

「飴飴食べ食べかゝさんが、糖尿病で息しょゝちん」

イスに座り、俺の勉強机の上に飴をたくさん並べてなにかやっている女の子を発見したのが四分前。その女の子が先ほど俺の頬を殴っちゃってくれた雨沢だということに気づいたのが三分五十秒前。警察か学校に電話しようかとも考えたが、犯罪的なオーラがまったくなかったので、なぜここにいいのかまずは話を聞こうと思った

のが三分前。

以後なんの発展もなし。

雨沢の格好は、学校の時とは違い制服ではなかった。まるで理科の先生を思わせるような、白衣で包まれている。よく見るとその白衣の下には、制服が見え隠れしていたので、ただ白衣を一枚上に纏った様な格好だ。

もの凄く似合っていると思った。

まるでこの服装が私服とでも言わんばかりの着こなし方。高校生が制服、会社員がスーツ、メイド喫茶にはメイド服といった感じで、雨沢には白衣以外想像が出来ない。……いや、ほんの一時間前に、制服姿の雨沢を見たのだが、なんていうか、そんなものはただの夢であつたかのような……ん？ 夢？

「そういえばあんた、夢がどうかさつき言つてなか　っおうあ  
うああああああ！！」

『どうか』あたりでいきなり立ち上がった彼女が座っていたイスが、この部屋ご自慢のピカピカフローリングを滑ってきて俺の左足小指に激突。『なか』辺りからその後の記憶が薄れていてなにがあつたかよく覚えていないが、気がつく俺の体は寝かされた状態になつていた。

ふー、急展開すぎてわけが分からない。とりあえず俺は一言。

「小指の感覚が……ない……!？」

く周囲の変化と俺の体調変化く      p a r t 2      (前書き)

小説の1パートをどれくらいで終わらせればいいのかよく分からず、何か変な始まり&終わり方になってしまっています。

読みやすさを第一に考えていきたい！！

一つ不思議なことがある。

なぜか目が開かないのだ。……いや訂正。目を開いた感覚はあるのだが、それによって周りの風景が網膜に映りこんでくることはなく、ただ暗いだけ。

まさか気絶している間に夜になってしまったのかとも考えたが、この部屋は例え豪雨の真夜中だとしても、周りに明るい建物が多くあるため、カーテンを閉め切ってもここまで真っ暗闇になることなくて在り得ない。

となると考えられるのは、俺の目になにか布的なものを被せて視界を奪っているということなのだが、不思議とそんな感覚は一切ない。

いったい何が起こっているのか、とりあえず起き上がって今の状況を確認しようとしたのだが、どうやらその行為も許されないらしい。

首、胸、腰、両腕、両手首、両太もも、両足首に金具のようななにかが架かっていて、実質起き上がることも出来なければ手を動かして周りの状況を確認することも出来ない。

……さて、ここまで冷静に今の状況を確認してきたが、正直もの凄く怖いぞ。

なんだ、なんなんだ？ やべえよおい、改めて考えてみたらなん

だよこの状況。え？ 俺なんか悪いことした？ そりゃあ確かに一人本ばっか読んでたけど、迷惑をかけた覚えは一度もないよ？ わ、やべ、むっちゃ怖くなってきた。汗止まんねえよ……。だ、誰かー！ 助けてよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおうう！

プシューー

え？ 何今の空気が抜けたみたいな音？ まさか酸素抜かれてる？ え、なんで？ 真空パック状態にされちゃう？ それでどこかの国に運ぶの？ っていうか人間運ぶときに真空にするのじゃなくてそんなことしたら俺死んじゃうジャン！ 酸素吸えないと生きれないよ俺！ うあああああああああああああ！ こんなことならもつと友達作っとくんだった！ 死んだとき悲しむのが肉親だけってなんか寂しいじゃありませんか！

「何泣いているんですか先輩。キモチが悪いので、早くそこから出てくれませんか？」

「ほうえ？ ……え？ え？」



死ぬ前に自分の人生でどこが悪かったのかという大反省会を頭の中で行っていると、唐突に頭上からおっとりとした、色を付けるとしたら入学式に子供たちの背中を優しく見守ってくれている桜の花の桃色みたいだな、そんなフワ〜とした声が聞こえてきた。ただし発言内容と顔の表情は、般若のようだったが。

「先輩のくせに情けありませんね（ペロペロ）、年下の私に気品に劣るようでは世も末ですよ（ペロペロ）」

「そんなキャンデーを必死こいて舐めている奴に言われたくないが……」

よく見ると、俺の体に架かっていた金具はすべて取れており、体は自由に動かすことが出来た。まだ痛む小指に若干の恐怖を覚えながら、体をゆっくりと起こす。……そこで改めて、俺がどんな場所に閉じ込められていたのか、そしてここがどこなのかを確認する。

どうやら俺はカプセル式の装置の中に監禁されていたらしい。

よく見ると頭にはまだケーブルらしきものが機械に繋がっている。さっきの空気が抜けたような音は、このカプセルが開いた音だったというわけか。

場所は一応俺の部屋……だよな？　なんか見慣れないパソコンやら複雑な機械やらが所狭しと置いてあり、映画に出てくるどっかの秘密スパイの隠れ家みたいな状況になっている。

それでもここが俺の部屋だと判断出来た理由は、天井に貼ってたアニメキャラのポスターのお陰なのだが、あまりにも部屋の状況とポスターに写っている美少女の表情が合ってなく、なんだかいつもは可愛らしい表情なのに、今は不気味な笑顔を浮かべている女スパイにしか見えないといった有様だ。あとで剥がそう。

「先輩って意外と寛大な心をお持ちなんですね。私の計算だと、この部屋の状況を見た先輩は、「え、マジかよ！ 何々、美少女の次はSF？ 俺ってば凄い体験しちゃってんじゃねえの！」的な発言をしたあと、興奮して裸に靴下で私に襲い掛かってくると思いましたが、半分しか合っていませんでした」

「お前の中の俺、最低男過ぎるだろ。あと半分ってなんだよ半分って」

「先ほど『夢吸い取る君三号』から出てきたとき、発狂していたことと、あと私が美少女という部分です」

「……」

自意識過剰な上に、性格も中々の悪さだった。

恐らくコイツ、俺と同じで友達少ないんだろうな。そこだけは同情してやるよ。

「今何か先輩、私に対して在らぬ妄想と、侮蔑の眼差しを送りませんでしたか？」

「その考えが在らぬ妄想だ。俺はいつだって無頓着な人間であると自分でも自覚しているよ」

変な所で鋭い女だなあ、おい。

「そうですか、信用度ゼロパーセントの発言、ありがとうございました」

「……ほんとお前、いい性格してるよな」

「ええ、よく言われます」

何を勘違いしたのか、俺の言葉に対し微笑んできやがったよこの女。まあ恐らく心の中には恐ろしい量の罵詈雑言が埋め込んでいるんだろうけど。

「ところで、そろそろお前が何をしようとしてるのか、教えるよ」

「何……とおっしゃいますと?」

「いや、この部屋の状況でなに誤魔化そうとしてんだよ。いったいお前は人の部屋で何やるうとしてんだよって聞いてんだ」

「先ほどから先輩、『ナニ』や『やろう』や『お前、なかなかいい体してんな』なんて卑猥な言葉を、よく堂々と美少女の前で言えますね。尊敬しますよ」

手に持った飴をコチラに突きつけながら、自称美少女は上目遣いでコチラを睨んでくる。

いちいちカンに触る発言をする女だなコイツ。あと、誰がいつそんな変態発言をしたんだよ。

と、今気づいたのだが、コイツの身長学校で会った時より縮んでいる気がする。

少なくともこんな上下関係が生まれるほどの身長差はなかったはずだ。へたすると百五十ないんじゃないか?

「ああ、それはそうですよ。私学校にいるときはアレを着けていますから」

「あれ?」

「ええ。あれですよ、あれ」

そう言つと雨沢は、玄関の方向に体を向け、そしてその先にある何かを指差した。

……足だ。足がある。

少し薄暗い中にひっそりと浮かぶそのシルエットは、まさしく人間の足。

しかもご丁寧に学校で履く、一年生を示す緑色の上履きを履いているのがここからでも分かる。ちなみに二年生は黄色、三年生は青色だ。

「なんだ……あれ？」

「足ですね」

「馬鹿かお前は。なんだつてのはアレの見た目の表現を聞いたんじゃないくて、なんで足が俺ん家の玄関に佇んでいるんだって意味のなんだだ」

「アレは私が発明したものです。コンプレックスを解消したいとい

う乙女の願いを叶える魔法の一品、

『背伸びゝる君三号』です」

「発明つて……」

お前の家系は日々「タイムマシン」を作ることだけを目標にしている一族か！！と突っ込みたかったが、真顔で「そうですよ？」と言われるのが怖くてやめた。

そういえばさっきも『夢吸い取る君三号』なんて単語を当たり前のように使っていたし……、あながち俺のタイムマシン説も間違つてなさそうだ……。

今は本当に10月ですか？ と疑いたくなるようなこの暑さ……ヤバイ。

でも油断して、パンツ一枚で寝ると風邪は余裕で引くw

この執筆スピードがいつまで続くことやら……。

「じゃあそろそろ私の目的を、話させて貰いますね」

雨沢は急に真剣な顔をしたかと思うと、先ほど俺の小指を襲ったイスに座り、俺に座るように促してくる。と言っても、座る場所は床しかないので、なにか釈然としないのだが。

「先輩は、夢ってどのようなものだと思います？」

「は？ 夢？」

また夢の話か。

「はい。夢です」

「夢ねえ。まあ不思議な現象と言えばそうだよな。構造はよく分からないが、別に夢で困ったことなんて一度もないし、いいものだと思うぞ。俺もよくマクラの下に好きなアニメキャラの写真を入れて、夢に出てくるように願ってたし。夢は妄想を体験させてくれる最終手段だと、俺は思う」

「そうですか……やっぱり変態なんですね、先輩」



年下にしんみりと変態宣告を受けた高校生、その名は浦隼人。現在精神パラメーター急低下中でございます。

「せっかくマジメに答えてやったのに、その受け答えはないんじゃないか！」

「いやそもそも私はそんな答えを期待していたわけでもないですし、根本的に質問内容を履き違えている先輩のほうに非があると思いますよ。なので逆に謝ってほしいくらいです」

む、少しカチンときたぞ今の言葉。

大体、なんで俺はこんな不法侵入少女の質問に律儀に答えちゃったりしてるんだよ。人と関わってこなかったと言っても、コイツにだけは関わってはいけない、そんな気がする。

「じゃあ、お前が望んでいた答えてのは、なんだよ？」

なので、さつさと満足してもらい、さつさと目的を達成してもらい、さつさと関係を切ってしまうおう作戦を実行します。

「まあ、正直に言えば先輩の答えなんてどうでもいいのですが……」

俺の右手、震えるな。怒りを覚えたとしても相手は女、過ちを犯すな！

「まあいいでしょう、いつかは耳にすることだと思いますし、私のことについて少々話させてもらいます」

「ずいぶんと自分勝手な話題の切り替え方だな……」

「夢と私、それは言わば、切っても切れない関係。赤ちゃんにベビーカー、小学生にランドセル、中学二年生にに妙なテンション、そんなあたりまえの組み合わせのように、私と夢は一生のパートナーとなるような、そんな関係」

雨沢は一度空を見上げるようなそぶり（実際には美少女ポスターが貼ってある天井）を見せた後、唐突にピシッと、こちらに人差し指を向け、

「知ってます先輩？ 人の夢って見ることが出来るんですよ？」

「え、え？」

人の夢を見る？ ……どゆこと？

ポカンと口を開けていたのが自分でも理解出来た。それくらい、コイツの言っていることに繋がりが見えない。

「そうですね例えば、先輩が空を飛んでいる夢を見たします。大空を、自分の両手だけを使って有意義に飛んでいる。それはもう最高の気分でしょうね。で、その夢を私は第三者目線で見る事が出来る。言わば、先輩が空を飛んでいるのを飛行機の中でゆったりと眺める事が出来るといった、そんな感じです」

でもですね、と雨沢は一度間を空け、

「ここが難しいところなんです、夢って必ずしも自分が主人公とは限らないじゃないですか？ もしくは、たとえ自分が主人公だったとしても、その自分を第三者目線で眺めるといった夢も存在する。そういう場合、私とその夢を見ようとしても、「第三者目線」という席はすでに取られているわけですから、その夢を見ることが出来なくなるんです」

「ちょ、ちょっと待てよ。人の夢を見る？ そんなことが本当に出来るのかよ？」

あまりにも現実ばなれしていて、理解が追いつかない。まず、なんでそんな話を俺にするのかという第一の疑問さえ解決していないのに、色々な情報を詰め込んでくるなって話だ。お前は詰め放題の袋に限界以上の野菜を突っ込む主婦か！……すべってない、決してすべってないぞ！

「裏世界じゃ、今じゃ当たり前のように人の夢が売買されています。夢の中の出来事を分析すれば、その人がどんな生活を送ってきたのかなども分かっちゃいますしね。しかし、それは所詮人の夢を『見る』ことしか出来ない。そんな中で私は、ついに完成させたんです」

「それって、つまり……」

クイズの出題者が答えを言う瞬間のような活き活きとした表情で、

「二次元から三次元への進出、私は今まで『見る』ことしか出来なかった人の夢を、『体験』出来る機械を発明したんです！」

ババン！　なんて効果音が聞こえてきそうな自信のこもった笑顔で、俺の頬に飴を押し付けてくる。やめい、ベトベトするわ。

しかし……体験？　バーチャル体験みたいなものだろうか？

ゝ 周囲の変化と俺の体調変化 〵  
p a r t 4 (前書き)

もう三連休も終わりか……なんだろうこの喪失感。  
早すぎる、平日と比べて終わるのが早すぎるっ!!

もうすぐテストなので、勉強頑張りたい!!

雨沢は物凄いドヤ顔をしながら、

「これって凄いことだと思いませんか？ 褒めてもいいんですよ先輩。いやむしろもう敬っちゃってください尊敬しちゃってください下僕になってくださいよ」

「いや、そんな突拍子もないことをいきなり言われても、信用度に欠けるんだよお前の発言。人の夢を体験？ そりゃあ凄いことだと俺も思うが、なんでそんな話を俺にするんだ？ その裏社会とやらの住人に売り込みに行けばいいだろうに。一般人の俺にはまったく関係がない話だと思うぞ？」

あえて下僕発言には突っ込まず、正当な意見をぶつけてやった。

というかそもそも、人の夢を見たり体験したり出来るという所も甚だ疑問だ。そんな話は聞いたことがないし、そもそもそんなものが開発されたんならもっと世界中が大騒ぎすると思うんだが。

「だから裏世界にしか広まってないって言ったじゃないですか。夢を見ることが出来るなんてこと、ほんとに一握りの闇組織しか知りませんよ。それに私が開発したこの『夢吸い取る君三号』だって、つい先日出来たばかりで、まだ誰にも知らせていませんですしね」

裏世界、闇組織……、なんかコイツとこのまま親しい関係になつてしまふのは死亡フラグのような気がしてきた。クワバラ、クワバラ。

「あと一番の間違ひは、先輩が無関係と言つところですよ」

「んあ？ 俺？」

「そうです。浦隼人という人物は、私の計算上この計画に欠かせない人物なんですよ」

「…………へえ」

「なんですか先輩その反応。こんな美少女発明家が、あなたが必要なんですと言っているのに、先輩は、変態は変態でもそつち方面の変態さんでしたか、このロリ野郎」

「俺に勝手な設定を付け加えるな！ それと、お前は一心ロリに分類されるということだけ教えといてやる」

「まあ言葉だけじゃ信憑性に欠けますし、論より証拠。実際に先輩に体験してもらいましょうかね？」

コイツの会話の切り返し方は天然なんかじゃなく本心でやってやがるな……。沸々と悪意の念が感じられる。

「といつても、サンプルが先輩の夢しかありませんし、とりあえず先輩には先ほどまで見ていた夢を、また体験してもらいましょうか」

雨沢はそう言うと、近くにあったパソコンから、一本のUSBメモリみたいなものを抜き取り、先ほどまで俺が寝かされていたカプセルの一箇所に差し込んだ。

「この『夢吸い取る君三号』はですね、なんと、『夢体験君三号』とも兼用されているのです！ 凄いでしょ？ この機械一つで夢を吸い取ることも出来れば、体験することも出来る。まさにファンタスティックです」

置いてきぼり感が物凄いのので、ここでちょっと整理しておきたいと思う。

こいつは今日入学してきたばかりの美少女高校一年生、雨沢夢美。気がついたら俺の部屋に色々な機械類が置かれ、夢がなんだとか喚いている。

で、俺はその最初の実験材料になろうとしている。



ここまでの情報をふまえ、コイツの今までの発言を考慮した上でどうすればいいかを判断したところ……。

「逃げる！」

「もう遅いですよ？」

しまったああああ！！ 既に俺の体はほんの数十分前の状況と変わらぬ姿をしていた。手を挙げることも許されないこの緊縛の状況！

「安心して下さい。安全は第一に保障します。ところで最後の質問ですが、先輩は先ほど見た夢がどんなものだったか、記憶がありますか？」

「え、記憶？ そんなのないけど……、っていうか待て、早まるな。さっさと俺をここから出すんだ」

「良かったー。『夢吸い取る君』で吸い取ることで、その本人には夢の記憶がなくなる仕様になってるんです。あ、でもまだ先輩が夢を見ていなかったという可能性も無きにしろ在らずですが……、まあ先

輩なら大丈夫でしょう」



あああああああああ！！」

頭に感じたものの凄い激痛。今まで体験したことのない種類の、想像を絶する痛みが沸き起こった。例えるなら頭から四トントラックへ突っ込むような……、いや、そんな痛みじゃない。締め付けられるような、いや、これも違う……、あ、あああああああああああああああああああ。

数秒だったのか数分だったのか、よく分からない。もしかしたら何日も経ったのかもしれないが、気づけば俺はコンクリートの上に倒れこんでいた。

体に浸透する、コンクリートの無機質な冷たさ。周りは若干の日の光を感じるものの薄暗く、夕方だということが分かった。

「じじは……」

ここはもう……雨沢の言う通り、夢の世界なのだろうか……？

## 2章      ｝俺の夢に入る俺｝      part 1 (前書き)

いやゝ正直今から結末はどうしようかと考える日々です。  
出来れば100話くらいいきたいのですが、  
何か10話くらいで終わってしまう雰囲気……。

もっと文章力をつけないと。

## 2章 俺の夢に入る俺？

### part 1

「先輩、大丈夫ですか？」

「　　っ！！」

突然の雨沢の声に、過剰に反応してしまう俺の体。倒れていた体を無理やり起こし、雨沢の声が聞こえた方向に向き直る。……が、そこには雨沢の姿は見当たらない。

「説明を怠っていました、すいません先輩。あ、私はその世界には存在していませんよ？ 仮に先輩が見た夢の中に私が登場していたら話は別ですが、現実に存在している、本物の雨沢夢美はそこにはいません」

雨沢の説明を聞いている間、周りの風景を改めて観察してみた。

どうやらここは、俺の通う高校のようだ。

窓から見える校庭と下校していく生徒、ふと後ろを振り向けば俺の在籍する2・3とプレートが貼ってある教室がある。

「もう一つ補足すると、私は今先輩の脳に直接言葉を送っています  
が、これもあと十七秒後には出来なくなってしまうです」

なので私から最後に……ふー、と、一旦深呼吸をしたような音が聞こえたかと思ったあと、

「キーワード、『捲る』。制限時間、三十二分、ミッションスター

ト……」

ブツツ　　、ツー、ツー……。

……え？

「ちょ、ちよつと待てよおい……！」

いくら叫んでも、聞こえるのは窓の外からの、下校中学生の笑い声だけ。俺の言葉を聞いてくれるものはいなさそうだった。

「待てよおい……！　　いったいどういうことなんだよ……！」

いくら叫んでも無駄だということはなんとなく分かる。ただじつと何もせずいることが怖かった。

あの雨沢夢美という女を甘く見すぎていたのかもしれない、何てことを今更ながらに思う。

と、そのとき、

ガラガラガラ

窓の外を眺めていた俺は、真後ろから聞こえた教室の戸が開く音でさえ、過敏に反応してしまった。しかし、そこからさらに窓から身を投げたくなるほど驚いてしまったのは、そこに立っていた人物に原因がある。

「た、立花……さん？」

「浦君？　こんな時間にどうしたの？　もう下校時間すぎてるよ？」

俺には異性の友達など存在しない。

故に女の子と喋った記憶など、母親のお腹の中にいた記憶と同等になるくらいないのだが、この目の前にいる彼女と喋った記憶だけは鮮明に覚えている。

いや、向こうはただ単に、クラスで浮いていた男子生徒を、馴染ませてあげようといった学級委員的な発想で話しかけてくれただけだと思うのだが、少なくともあの時の俺にとっては、その行為だけで十分だった。

わたくし、浦隼人は、目の前に立っている、立花楓さんに恋をしています。

「……た、立花さんこそ、な……なんで？」

「私？ 私はほら、学級委員になっちゃったから、その仕事だね」

俺としては、なんでこの世界にいるのですか？　てきな意味での「なんで？」だったのだが、立花さんは教室にいた理由を教えてくださいました。

立花さんは軽く親指を突き出した手で、後ろを指差し、「ちよつと教室で話さない？」と、俺を誘つて…… つて、ええええええええええええええええええええええ！！



「えっ！！ お、俺と、お喋り……ですか？」

「うん、だって浦君、去年からずっと休み時間は本ばっか読んでるし、学校が終わったらすぐ帰っちゃうし、話す機会が全然なかったんだもん。あ、用があるんだったら」

「い、いえ！！ 喜んで！！」

ここが一瞬夢の世界だということを忘れるほど、俺は完全に興奮しきっていた。ここまで自分の鼻息が聞こえてくるという体験は、生まれて初めてだ。

改めて考えると、これは俺が見た夢であるってことだよな？ ……  
… ナイス俺！！ 最高のタイミングで最高の夢を見てくれてありがとうっ。

「じゃあ入って……って、まるで私の家に浦君を招待しているみたいだね」

「そ………そうですね」

うつわなんかもうむっちゃ可愛いんですけどっ！！

これが本当につさき俺が見た夢だとしたら、雨沢に吸い取ってもらったのはラッキーだったのかもしれないな。こんな夢を見た後、現実に戻ったときの喪失感を想像すると……はあ。

教室に入っていく立花さんの背を眺めながら、俺も中に入ろうとした、

その時。

「　　っ！！」

針を刺されたような、ピリツとした痛みが手首に伝わった。

条件反射でふと痛みのした手首を見てみると、なぜか腕時計のよ  
うなものが手首に巻きついている。

パネルには、『26・12』と表示されており、どうやら時を示  
すものではなく、何かのカウントダウンだということが分かった、  
着々とデジタルの数字は数を減らしている。現在『25・58』。

正直、こんなものに今は気を取られている場合ではない。なんと  
って、あの憧れの立花さんと話せるという機会が目の前にまで迫っ  
ているのだ。こんなことは多分、現実ではもう経験出来ないだろう。

しかし……不思議なことに。今はこの腕時計のことが気になって  
しょうがない。

俺はいつたい……どうしちゃったんだ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2307o/>

---

もしも人の夢を体験出来るとしたら.....

2010年10月18日10時12分発行